
顔面偏差値を 1 0 上げる方法

齊藤狐兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

顔面偏差値を10上げる方法

【Nコード】

N02530

【作者名】

齊藤狐兎

【あらすじ】

いじめられて自殺するなんて甘えだ。

俺は前向きな自殺をする。不細工な自分と決別してイケメンとして生まれ変わるのだ。

超絶不細工中野卓郎の魂がコンクリートジャングルを駆け巡る！

屋上からの眺め

いじめられて自殺する奴は本当に馬鹿だと思う。

学校を変えるなり引越すなりすれば簡単に解決する話した。

僕が抱えてる苦悩に比べれば月とすっぽん、ゲームボーイとPS Pくらいの違いがある。

隣の県の進学校に転校しようが、アメリカでトレーラー暮らしをしようが僕の悩みは解決しない。

所在地や所属するコミュニティとは全く関係がない僕の悩みとは超絶的な不細工であるということだ。

どれくらい不細工かというと、悩みを相談した相手が無言で押し黙った末に「アメリカの整形ってすごいらしいよ」とのたまってしまっレベルである。

こんな悩みを相談されたら「そんなことないよ」とか「気にしすぎだよ」とか「精神を高め上げれば自ずと顔もそれ相応のものになるのよ」なんて言って励ますのが普通じゃないか。

アメリカの整形を勧められるってどういうことだよ。ちなみにそいつは互いに唯一無二の親友でわざと人を傷つけようとするような人間じゃない。

最悪。つまり僕の顔は日本の整形技術じゃ太刀打ち出来ないほど

に最悪だと純ちゃんは判断したってことなんだ。

もう嫌だった。誰かに顔を見られるのを恐れ、常にうつむき、帽子を被り、タモリさんみたいなサングラスをかけて生きてきた。

モグラのような生活は精神を蝕んだ。そんな折、太木和夫先生の本に出会った。

「輪廻転生入門」そして「輪廻転生実践編」

この二冊の本に僕は救われた。希望を見出した。輪廻転生に。

僕は「来たあー」と叫んで両手を広げてみた。一昔前にみんなやっていたのを見えずとやってみたかったのだ。

きつい陽射しが僕の生白い顔を焼いた。十二階建てマンションの屋上が地上何メートルなのかわからなかったが太陽に近いだけ紫外線も強いはずだ。

肺の空気を全て口から吐き出した。

僕は今日生まれ変わる。ここから飛び降りるのだ。決して逃げやあきらめじゃない。あくまでもREBORN（再生）のためだ。

父さん母さんが頭に浮かんだ。

母さんはいつでもやさしかった。父さんが厳しかったのも僕を思っていることだってわかってる。

二人は悪くない。悪いのは全て僕、の顔だ。

（お父さん、お母さん。先立つ不幸をお許してください。でも決して悲観的に捉えないでください。これはあくまでも旅立ちなのです。生まれ変わったら、もう少しきれいな顔に生まれてきますのでまた機会があつたらお会いしましょう）

三十分かけて書いた遺書。

皮肉っぽいけど、素直な心情を書いただけで他意はまったくない。逝こう。屋上の縁までゆつくりと歩いた。下を眺める。下校中の小学生が歩いている。カバンから突き出た縦笛を見て涙が出そうになる。

なにを悲しむことがあるんだ。生まれ変わったら数年でああなるはずじゃないか。

「ゲッツ！」

両手を拳銃のように前方に向けて叫んだ。

これもやりたかったけど出来なかったことの一つ。最後に思い切りやってやろう。

「ゲッツ！！ & ターン」

くるり回ったところでバランスを崩した。重心を後ろに傾けてなんとか留まる。

大きなため息が出た。

別に死ぬことをびびってるわけじゃない。心の準備体操ってやつがまだ終わってない。。

「心の準備体操第一！ 大きく息を吸って人生を回想しましょう」

教育テレビのお兄さんを意識して明るく言ってみた。

1、2、幼稚園で隣の寝ていた女の子が泣き出した。

3、4、学芸会の劇で最初からゴブリン役に決まってた。

5、6、小三なのに中学生料金取られた。

7、8、行事の度に顔のアップを撮られたけど、自分以外誰も買わない。

落下の結果は真赤

「ひひひひひひひひひひ」

思わず声を上げてしまった。良い思い出が一つもないじゃないか。でもそのおかげで心の準備が整った。もうこの世に未練はない。

空を見上げた。雲がひとつもなかった。空を見ながら飛べたらどんなに気持ちがいいだろう。

頭に閃いたのは走り高跳びの背面飛びだった。あれだったら下を見ることなく落ちていけるし、なによりちよつとかっこいい。

落ち方が不自然だからって他殺を疑われたりして。

最高だ。我ながらナイスな思いつき。

両手に唾を吐き、助走距離のため五メートルほど下がった。

「松田翔太風に生まれ変わるんだあゝ！」

魂の叫びと共に駆け出す。

縁の五十センチほど手前でコンクリ床を強く蹴った。体が宙に舞い建物の敷地から飛び出したところで僕は気づいた。

これじゃベリーロールだ。

頭から落下する。ジェットコースターなんて比にならないほどの重量が頭を襲った。

飛ぶ前は、アッという間に地面に叩きつけられるだろう、と思っていたがそれは違った。

体感速度は驚くほどに遅く、10分の1でスロー再生してるような感じだった。

試合中のキャプテン翼や幕ノ内一步はこんな感じなんだろう。

ジワリジワリとアスファルトが近づく。

恐い。数秒後に訪れる苦痛を想像して体が震えた。

でもこのまま生きていくほうがよっぽど苦しいに決まってる。

そう考えると恐れが消えた。

「ママ、はやく〜」

おもむろにマンションから子供が出てきた。まだ小学校にも上がらないような幼児。

幼児が上を見上げた。目がばっちりあう。幼児は呆けたように口を開けて驚いている。

最悪なことに幼児は僕が墜落するであろう場所に立っている。

やばい。このままじゃぶつかってしまふ。

心だけはきれいでいようと、十七年間清廉潔白を心がけて生きてきた。

だからこそそのイケメン転生である。ここで幼児を巻き添えにしたらイケメンどころか地獄に落とされてしまうかもしれない。

必死で体を捻った。しかし落下軌道は全く変わらない。

もう駄目だ。ぶつかる。

その刹那幼児が横に飛んでいった。

代わりに見たことのある男が衝突地点に現われた。

小麦色に焼けた肌に白光する並びの良い歯牙。鼻筋の通りは良く、快活に輝く瞳はきれいな二重二重二重二重二重二重二重二重二重。

小川俊樹いーーーー！！！！

白衣軍団は一向に介することなく動き続けた。

僕の胸に注射したり電気ショックを与えたりしている。

見ていられなくなって外へ出た。

出てすぐ左のソファーに父さんと母さんが寄り添って座っていた。
ハンカチを目に当てながらお互いの手を握り合っている。

キモイ。キモイキモイキモイ。申し訳ないけどキモイよ二人とも。

遺書見たんだろ。だったら諦めてよ。

「僕はこれからイケメンに生まれ変わるんだから心配しないで」

耳元で母さんに言ったが反応はまったくくない。

「なんだよこれっ」

大声が聞こえた。それは明らかに異質な声だった。聴覚ではなく
心臓に直接響いているような感じ。

呼ばれているような気がした。

声がした部屋に飛び込む。

そこに浮いていたのは頭を抱えた小川俊樹だった。

なんと声を掛けていいのかわからない。

まともに話したことが一度もないのだ。

でも謝らなければいけないだろう。謝らなかったせいでイケメンに生まれ変われないなんて事態になったら大変だ。

「あの、この度はどうもご愁傷さまでした」

「ん、あんた俺が見えるのか？」

小川が言った。目が血走っている。

「はい。だって同じ……」

「なあ、なんでこいつら俺のことシカトするんだ。なんでこいつらを触ろうとしたらすり抜けるんだ」

小川が僕の肩を揺さぶった。

「なあ、ベッドで死にかけてるこいつは誰なんだ？」

小川の台詞に思わず固まった。ひょっとして小川は……。

「なあ、俺は誰なんだ。なにがなんでどうなってるんだ。頼むから教えてくれよぉ」

スルースルーもシースルーの内

「それはつまり、その、なんというか、うん。多分、そうじゃないですかね」

「なにが言いたいのかまったく分からないよ」

どういえばいいんだろう。「僕の自殺の巻き添えで死んでしまったんです。すいません」なんて言って許してもらえるのか。

「くっそー。マジでなんなんだよ!」

小川が壁を拳で殴った、が拳は壁に飲み込まれてなんの音も発生しない。

「なんでだよ。なんでなんだよ」

小川が医者頭の殴りつけハイキックを叩き込んだ。しかし全て無駄。空気を混ぜただけだ。

息を切らした小川が僕をにらみつけた。

許してもらえそうな雰囲気はない。今にも殴りかかってきそうなオーラを出している。触れられることがない以上別に殴りかかってこられても問題はない。でも嫌じゃないか。人に嫌われるって。

「なんとか言えやこらっ!」

小川のフックが降ってきた。僕は微動だにしない。当たるわけが

ないから。

ゴンツと音がして僕は後方へ飛んだ。

「なんで、なんでなの？」

小川と同じことを言っている自分に気づいて恥ずかしくなった。

「おまえは触れるんだな。言え。おまえが知ってること全部言え」

鼻が痛い。手をやると血がドクドクと流れていた。って、血が出てるってどういうことだよ。

「早く言わないともつかい殴るぞ」

小川が僕の胸倉をつかんで引っ張り上げた。無理矢理立たされる。

「おまえは誰だ。俺は一体何者なんだ。おいっ！」

揺さぶられて頭がガクガクした。

「僕は小川俊樹という中学生です。そしてあなたは僕のクラスメイトである中野卓郎です」

とっさに出た嘘だった。小川は驚いた表情で僕に詰め寄る。

「つまりあそこで寝ているのが中野卓郎、つまり俺なんだな」

「ち、違います。あれは小川俊樹。僕の体です」

「でも顔が違うじゃねえか」

「今の姿は魂の顔。何百もの前世が重なりあつた顔なのです」

胸を張って太木和夫の著書を引用した。

「じゃあ、中野卓郎はどこにいるんだよ」

僕は隣の集中治療室を指差した。

小川はなにも言わず隣の部屋へ飛んでいった。

悲鳴のような雄叫びが隣から聞こえた。

消沈した小川が戻ってきた。

「ひどい怪我だね。顔なんてぐちゃぐちゃでさ。でも大丈夫だよ。最近のアメリカの整形はすごいから」

小川を慰めようと声をかける。

「……死んじやったよ。俺、死んじやった」

「死んだって!? マジ? やったあ」

言葉に出してから過ちに気がついた。小川の顔色がみるみる変わってゆく。

「なんで喜んでんだよ。おまえ人のこと馬鹿にしてんだろ」

小川が手を伸ばしてきたのでとっさに後ろに下がる。死人同士は接触可能で痛覚もあると分かった以上、もう殴られるのはごめんだった。

「待てよ。ぶっ殺してやる」

小川のフックが再びうなりをあげて襲い掛かってきた。二度も同じ技をくらう僕じゃない。ガードしてカウンターでアッパーカットを叩きこむ、つもりだったがガードごと飛ばされ小川に捕まってしまった。

「殺してやる」

小川が左手で僕の髪の毛を掴み右手で顔を殴りながら言った。

「もう死んでるよお」

僕は真実を返した。でも小川は止まらず拳を振るい続ける。

顔中が痛かった。でも意識が遠のくような感覚はまったくなく、ただひたすらに泣きたくなるほど痛かった。

「先生、クランケの様子が……」

看護婦の叫び声が耳に入った。

「へへっ。おまえも死ぬみたいだな。ざまあみやがれ」

憎まれ口を叩く小川の体が徐々に薄くなっていくのに気づいた。体当たりしたら易々と後方に吹っ飛んでいった。

小川を捕まえる。

「てめえ、なんなんだこの野郎。やるならやってやるぞ。かかってこいや」

言われるまでもない。さっきやられたことをそのままやり返した。人を殴ったのは初めてだったが、案外気持ちがいいものだった。というよりこうしたい欲望をずっと抑えていたことに気がついた。

小川はひぎゅっとかぎゃあとか言いながら血反吐を吐きまくり、一分と持たずに動かなくなった。

でも僕は知っている。どんなに辛かろうが意識を失うことはないことを。

再び殴る。殴る殴る殴る。顔はもちろん、腹や肩。腕から脚までいたる箇所を殴りまくった。

小川は泣き叫び許しを乞うた。でも僕は止めない。もう止まらなかった。

ヒューーーー

ガスが漏れるような音が部屋に響いた。途端に小川の体がどんどんと細くなつてゆく。

バットほどの大きさになった小川が隙について僕の脇の間から逃げていった。

ベッドで治療を受ける小川に向かった小川は、その口の中にひよろつと入っていった。

僕は動物的な勘で口に入る寸前手を伸ばしていた。

バット状の小川の尻を捕まえる。

引き抜こうとしたら逆にすごい力で引っ張られた。

掴むところもなければ踏ん張る地面もない。

力が一層強くなり、僕は尻を掴んだまま小川の口の中に吸い込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0253o/>

顔面偏差値を10上げる方法

2010年10月10日11時00分発行